

太子佛教の一考察

成田貢寛

一、

太子の仏教は二つの側面から理解することが出る。即ち歴史傳承の側面と内容的已證の側面とである。前者の側面からの考察は、太子の三經御選定の問題とも関連を持ち、重大なる課題の一つであるが、これを解決に當つては、三經義疏の内容的伝承関係と考慮に入れてのその当時の大陸支那の仏教々學の趨勢、半島に於ける仏教受容の経緯、日本に於ける伝來經論に關する論究と、三經義疏の内容的伝承の検討によつてなされなければならない。又内容的已證の側面からの考察は、太子仏教の特質の究明上、重要にして、太子の三經義疏、十七條惡法、三箇の御持きを始め、太子御一生涯に亘る全事業を含めての哲學的思想史的研究と、更に太子傳、日本仏教々學、太子信仰等の史的研究所を考慮に入れての總合に於て究明されねばならぬが、今は後者の側面に於ける太子仏教の一端を推尊經義疏を中心として考察せんとする。

太子の仏教が一大衆の教であることは云うまでもない。而して太子が経疏を引し勝鬘・維摩・法華の三經のうち、一衆を説くものは勝鬘・法華の二經であつて、維摩は米だ一衆を明かすものでない、即ち太子は、

「大衆一衆大意要復同。所異少異。大衆猶是三中之別名。一衆則無三二之体。波若・維摩虽名大衆。而不名一衆。是其所以也。」（昭初会本、勝鬘經義疏 二九、左）

と説きたまふ。勝鬘經が一衆を説く經であることは、既に題名によつても明かであり、又卷頭の御言葉によつても、言ふところの一大衆が日常生活の全体を以て道を實現せんとする方々、仏の教であることを明らかに示している。次に法華經が一仏衆を説く經であることは、「十方仏土中唯有一衆法無二亦無三」の經文によつても明らかであり、又太子の理解したまふ所の卷頭の御言葉が示す如く一衆因果の理、即ち一因一果の理を説くものである。従つて太子の仏教を理解せんが爲には、勝鬘・法華の二經の義疏を通じて一大衆が如何なるものであるかを明らかにしなければならぬがこれが所論は既に充教せる所であるから省略することとする。さて維摩經は前述の如く一大衆を説くものでなく、般若經と共に一大衆の方便とされるのであるが、太子が維摩經を通じて体得された空觀が一仏衆の教に對して有する意義は大きい。太子は維摩經の所説に就いて、

「維摩詰者。乃是已登正覺之大聖也。論本既喫真如冥一。詠述即示万品同體、德冠衆生聖衆。道絶有心之域。爭以無為々爭。相以無相為。何有各相可林。國家事業為懷。恒大悲無

惠施存益物。し

(昭和会本、維摩經義疏 一丁 左)

と説きたまふ。太子の御理解し給ふ所を要約するならば、① 何々の事象はその何別相を止揚せる絶対的な無相、即ち空に於て初めて何々の事象たり得ること。② かゝる空の実義たる道は吾々の分別を絶すること。③ 更にかゝる空の実義は空に流滞し了ることではなくして却つて益物、即ち下化蒼生にあること等である。かゝる明解なる御理解は太子の立湯を現定し菩薩道を説く御注釈の所々に散見する。法華經要果行品に、菩薩摩訶薩は國王や王子、大臣や官長、外道や惡律儀、爭鬭や女人に親近して何なりぬ。又年少の弟子や沙弥を畜えて何なりぬ。帝に坐禅を好み閑かなる処にありてその心を修護せよと教える經説の一段に對し、太子は、

「就第一不親近假有中、有十種不親近。一不親近國王王子大臣官長。是驕慢緣。二不親近諸外道。是邪見緣。三不親近諸戲以。是惡業緣。四不親近諸殺生。是犯惡穢緣。五不親近求声聞。是為求大嚴妨緣。為今日法花亦最不宜。六不親近諸女人及處女寡女少女、是愛染緣。為求道嚴妨。七不親近五種不男。是不足緣。八不加入他家。是生疑緣。九不樂畜年少子弟。是耽亂緣。十不親近常好坐樂禪師。本義、前九皆足成不親近以、從常好禪定以下、明忘親近以。」

(岩波文庫本、卷下、一三三—四)

と説きたまふ。驕慢、邪見、愛染、散亂等の緣となることかよくないものであつて、若し身をもつて國王や王子や沙弥に親近しつゝ、是れ等の諸緣を避け得るならば、經典の禁戒を文字通り守らねばならぬ道理はないと言ふのが太子の經文に對する親方であり、太子の御理解であつた。したがつて最後の一節に對する解釈に就いても、經文とは正反對の解釈がなされてゐる。してがつて過續に對する御理解に就いて、

「言、由有顛倒分別心故。捨此執彼。山阿、常好坐禪。然則何暇、弘通此經於世間。故知、常好坐禪、猶應入不親近也。」
(岩波文庫本、卷下、一三五)

と説きたまふ。彼此分別の心があるから東社会を捨て山に入り、學に坐禪を好むことになる。若し然れば何の暇あつて、此の一衆大衆の經典を世間に弘通することか出来るうかとの加解釈である。更に又、維摩經義疏弟子品に於ける維摩居士の舍利弗を小衆の徒であるとして呵責する加解釈に就いて、

「夫論理中之言、不必如舍利弗也。眞子既為小衆。故患世亂、紹隱山林以護身心。而淨名教阿若、若解万法即空、不存彼此者、何有身心而生散亂也。若存万法是有、不能亡者、固入山林、則散亂何離也。……彼此俱亡、無山可入、無世可避、云々」

(弟子品釈、昭和会本、卷中、二左)

と説きたまふ。その意味するところは顛倒分別の心による彼此の差別を超えてしまえば、山として入るべき處となく、世として避くべき處はないと加解釈である。今これを前の常好坐禪の加解釈と合せ考へる時、太子が如何に是非分別の心、彼此分別の心を打破せずんばやまなにかの維摩經の根本精神を把握し、經典理解の立場となし給ふことを知る。太子が一衆の教の根柢に深き空觀の理解のあつたことを知るべきであり、太子の宗教的信仰の特質を知るべきである。

終、